

# 林の環境

もっとも身近な林といえば、農村や郊外の住宅地周辺でみられるコナラやアカマツなどがまじった雑木林でしょう。泉南地域では、シイやカシなどの照葉樹の林のほうがより身近かもしれません。少し山の方へ出かけると、スギやヒノキの人工林が多くなります。さらに金剛山や能勢の妙見山などの山頂付近まで行くと、原生林に近いブナ林をみることができます。

このほかにアカマツ林や竹林などもありますが、ここでは代表的な4つの林について、その特徴やそこにすんでいる生きものの違いなどをみてみましょう。

## ぞうきばやし 雑木林

コナラやクヌギ、アカマツなどのほか多くの種類ぞうきの木(いわゆる雑木)で構成せいされていて、冬になると落葉する木が多いのが特徴です。燃料(薪や炭)や肥料、シイタケ栽培用の原木などに利用され、人の暮らしと密接に関わりながら維持されてきた林です。林床(林の下の地面のこと)は割合明るく、多くの植物や昆虫、鳥などがすむ、**最も生きものの豊かな林**といえるでしょう。

特徴的な生きものはシュンランやショウジョウバカマ、コバノミツバツツジ、キツネノカミソリなどの植物、カブトムシやクワガタムシ類、オオムラサキ、ギフチョウ、ミドリシジミ類などの昆虫類です。

北摂地域には、シイタケ栽培や炭焼き原料などに枝だけを長い間利用してきた結果、幹だけが異様に太くなった「台場クヌギ」(P.55参照)とよばれる木がみられ、クワガタムシなどの絶好のすみかや餌場となっています。



13. 雑木林